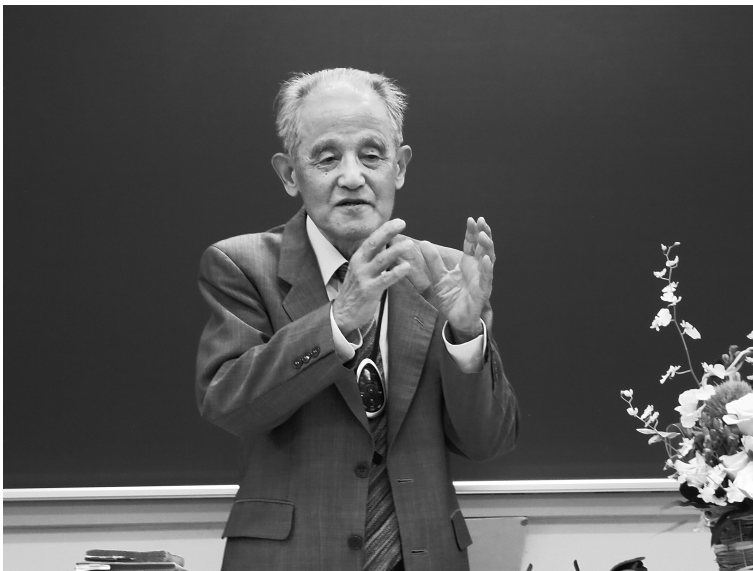


<神奈川大学経済学会 50 周年記念講演会> 第 1 回

異色の経済学者

—フリードリッヒ・リスト—

諸 田 實



[Ⅰ] 異色の経済学者

◆ 学者らしくない学者 ◆ 行動の人 ◆ 1 匹のドイツの羊 ◆ 素顔のリスト

[Ⅱ] 主著：『経済学の国民的体系』（1841 年）

◆ 未完の体系 ◆ 20 年余の思索と経験の結晶 ◆ 著書の構成

◆ 初版以後の各版 ◆ 『国民的体系』の謎

[Ⅲ] 『関税同盟新聞』（1843-49 年）

◆ 「体系を仕上げる」か「時局を論じる」か ◆ 趣意書 ◆ 晩年の最大の業績

【諸田】 今日フリードリッヒ・リストという、ちょっと古い人で、日本で言うと幕末の頃の経済学者ですが、そのリストについてお話をさせていただこうと思います。

レジュメの最初にしたように、リストは 1789 年の生まれ、ということはフランス革命が起こった年です。フランス革命は 7 月に起こりますが、リストが生まれたのは 8 月 6 日です。死ん

だのは1846年11月30日ですから、リストが死んで1年とちょっとでフランスでは2月革命、ドイツやオーストリアでは3月革命と、ヨーロッパ大陸に革命の嵐が吹きすさぶことになりました。リストはフランス革命と2月・3月革命の間の時代に生きたわけですが、この時代にはフランスがヨーロッパ大陸における自由主義の発信地でしたから、旧体制のもとで自由に憧れる人たちはパリへ亡命しました。ショパンもハイネもそうですね。それに対して、東の方ではロシア、オーストリア、プロイセンの3国が手を結んで自由主義の影響を押さえつけようとしていました。その西の自由主義と東の専制政治とがぶつかるところがリストの時代のドイツでした。

次に、リストが国民経済学者だという点について説明しましょう。経済学が18世紀の後半にイギリスで生まれたということは、皆さんご存じだと思います。ちょうど産業革命が始まる時期です。それで、19世紀にかけてイギリスで生まれた経済学や経済思想が、イギリスの工業製品と一緒に、つまり綿糸や綿織物と一緒に輸出されて、アメリカやフランスやドイツ——ドイツはまだ統一されていませんが——などの国へどっと入ってきたわけです。

この時に、例えばアメリカの場合ですと、イギリスへ綿花を輸出していた南部の農園主や輸出商はイギリスと一体となって経済を進めていこうとして自由貿易論を唱えました。ブリティッシュ・システム（イギリス体制）です。これに対して、イギリスから独立してアメリカの経済を発展させようとする北部の人たちは保護主義を唱えました。アメリカン・システム（アメリカ体制）です。そういう南北の間の自由貿易と保護主義の論争のなかで、アメリカの経済学の出発点になったのは北部の保護主義の方ですね。アメリカ体制派、国民主義学派の経済学で、これがアメリカの経済学の基礎になっています。実はリストはこのアメリカ体制派の経済学の創始者の1人に数えられているのです。

ドイツの場合には南北がアメリカの場合と反対で、穀物や羊毛をイギリスに輸出していた北ドイツの貴族農場主（ユンカー）や貿易商人が自由貿易論を唱え、それに対して、国内に生まれてきた工業を育てていこう、そのためにはイギリスから入ってくる工業製品に保護関税をかけて守ろうという保護主義を唱え、北の自由貿易論と南の保護主義との間で論争が起こっていました。リストは南の保護主義の代弁者で、それだけにドイツやイギリスの自由貿易の陣営からは猛烈なバッシングを受けたのでした。

ですから、リストの時代のドイツは、政治的には西の自由主義対東の専制政治、経済的には北の自由貿易対南の保護主義という、東西・南北の政治的・経済的な対立が渦巻いていた時代でした。リストが異色の経済学者だというのは、彼がこの渦から一歩身を引いて、書齋のなかでじっと研究を続けていたのではなくて、むしろ自分からこの渦の中へ飛び込んでいったからです。渦のなかへ飛び込んで、渦を乗り切ろうとして、結局最後はその渦に呑み込まれた、というのがリストという国民経済学者の生涯でした。

[I] 異色の経済学者

最初にリストが経済学者としていかに異色の学者であったかという、その異色ぶりについてお話しします。レジメに3つの点を挙げておきました。それから「資料1」にリストの生涯を書い
ておきましたから、それを参照しながら聞いていただきたいと思います。

◆**学者らしくない学者** リストが異色の経済学者だという第1の理由は、生い立ちというか彼の経歴にあります。当時のドイツの学者は小学校を卒業するとギムナジウムから大学へという進学コースを進みましたが、リストは違います。9歳から5年半、地元の小学校（ラテン語学校）に通って、それでおしまい、上の学校へ進みません。もし学歴を学校歴とすれば、リストの学歴は小学校卒ですね。ただし学歴を学習歴とすればリストは一生自分で独学で勉強を続けたということになります。ルソーもそうですね。

小学校を終えてから1年ぐらい家の仕事（皮なめしの手工業）を手伝いますが好きになれず、結局16歳で徒弟奉公に出ます。「書記見習い」という下級の役人になるための奉公です。「見習

<資料1>

リストの生涯

1789年	ロイトリンゲンに生まれる	9歳から5年半小学校（ラテン語学校）
1805-25年	ヴェルッテンベルク時代：それまでの経済学への疑問＝原体験	書記見習い→試補→郡書記（大学で法学を学ぶ）→内務省地方行政課→大学教授に任命（28歳）→商業政策の闘争（1819-21年）→代議院議員→冤罪を受けて逃亡・亡命・収監→釈放＝国外追放（渡米，1825年，35歳）
1825-32年	アメリカ時代：『国民経済学』の構想を宣言	保護関税運動に参加し、『アメリカ体制』を発表（1827年）ドイツ語新聞の編集 炭坑と鉄道の事業に成功 合衆国の市民権を取得
1833-37年	ライプツィヒ時代：鉄道事業の先駆者，ジャーナリストとして活動	『ザクセンの鉄道システム』→『ライプツィヒードレスデン鉄道』の建設に貢献→『国民雑誌』と『鉄道雑誌』を創刊→鉄道会社を追われてパリへ
1837-40年	パリ時代：『経済学の国民的体系』を書き上げる（48歳）	『経済学の自然的体系』と準備的作品を執筆→仕官の勧めを断りドイツへ
1840-46年	晩年：『国民的体系』と関税同盟とのための闘い	『経済学の国民的体系』の出版（1841年，51歳）→『農地制度論』（1842年）『関税同盟新聞』の発刊（1843年）数百編の時論を発表，ベルギー，オーストリア，ハンガリー，イギリスへ旅行，この間コッタとの決裂，「英独同盟」計画の挫折，仕官の失敗，生活の不安が重なり心身の衰弱が進む
1846年	健康回復の旅の途中，オーストリア領クフシュタインで自死（57歳）	

い」から「書記試補」「上級書記」となって、22歳の時にテュービンゲンの町の役所で働くことになりましたが、そのテュービンゲンには15世紀にできた古い大学があったので、勤務が終わったあとで法学の講義を聴講しました。この大学では神学部が一番大きな学部で学生数も断然多く、ほかには哲学部、医学部、法学部がありました。リストは法学の講義を聴いて、この時に初めてアダム・スミスの名前を知ったようですね。モンテスキューヤルソー、ユストゥス・メーザーなど、リストの思想に深く影響を及ぼす学者の名前を知ったのもこの時でした。

リストが書記として働いていたヴェルッテンベルク王国では、当時、行政改革が進んでいて、その一環として新時代にふさわしい役人を養成する学部を大学に作ろうという動きがあって、1817年の秋に5番目の学部として国家経済学部が開設されました。その時、新学部の開設に合わせて3人の教授が任命されたのですが、その1人に何とリストが任命されたのです。小学校を終えただけで徒弟奉公に出たリストが「国家行政実務」という講座の教授に任命されたというのは、リストの能力を評価する有力者の推薦があったとはいえ、大抜擢です。

早速、それをやっかむようにホモ・イリテラトゥス (homo illitteratus, 非学問人)、つまり学歴がなく、学問の世界で育たなかった人間が大学教授になった、という悪口が流れて、リストの耳にも入ったのでしょうか。レジュメに引用した言葉は、この時にリストが文教省という教会と学校を管轄する役所に出した手紙の中にあります。自分は「正規の課程を修めた学者」というより「学問を積んだ実務家」だ、大学は出ていないが、実務家として仕事をしながら勉強をした、と言っているわけです。こういう経歴からみて、リストは異色の経済学者ではないでしょうか。ですから、研究室や講座を通しての師弟関係というつながりや学説上の師弟関係がないと言っているのではないかと思います。

◆「行動の人」 学者とか教授というと普通は「書齋で思索を重ねる人」というイメージを持つでしょう。リストは「書齋の学者」というよりも「行動の人」、一生のうちに何度もそれまでの生活を捨てて運動に飛び込んだ「行動の人」でした。

1817年秋にテュービンゲン大学教授に大抜擢されたリストは、講義の準備のために給料の半分ぐらいをつぎ込んで本を買って猛勉強をしました。それなのに、1819年春に、僅か1年半で大学教授の地位をなげうって運動に飛び込んでしまいます。お配りした資料にある「商業政策の闘争」(1819-21年)です。実は、それまではリストはヴェルッテンベルクという西南ドイツの1つの国に目が向いていたのですが、この時に「商業政策の闘争」つまり全ドイツの商業統一を求める闘争に飛び込んだことで、彼の視野がいきに広がったのです。ドイツ全体を見て、ドイツの統一を目指す運動に進むのです。レジュメにある「講壇のための体系の建設」より、下働きであっても、「国民国家の建設」のために働く方が重要で名誉な仕事だ、というのはリストが後に書いた文章ですが、大抜擢された大学教授の地位を1年半で捨ててドイツの商業統一のための闘争に飛び込んだのもそういう思いからだったのでしょうか。

その後、リストは地元から選ばれて議員になりますが、密告がもとで訴追され、禁固10カ月

の有罪の判決を受けます。リストはこの判決を冤罪だといってフランスへ逃亡し、スイスへ亡命し、結局、釈放と引換にアメリカへ追放されます。1825年、35歳の時です。アメリカには7年暮らしますが、息苦しいドイツと違って世論が政治を動かす自由な国で、「行動の人」としていろんな運動に関わりました。

当時のアメリカで自由貿易を主張する南部と保護主義を主張する北部との間で論争が行われていたことは先ほどお話ししました。リストはドイツにいた時から北米で自由貿易に対する反対が強いことを知っていたようですが、アメリカへ渡って北部のペンシルヴェニア州に住むと、水を得た魚のように、北部の保護関税運動に参加します。ドイツで大学教授であったことを見込まれて、この運動の中心になっていた技術振興協会の幹部から自由貿易論を批判する分かり易い論文を書いてくれ、と頼まれるのです。リストは論文を12通の手紙の形式で1通ずつ新聞に発表することにして、1827年の夏から秋にかけて「アメリカ体制」という題で12回新聞に発表しました。手紙というのは受け取った人が分かるように書かないとだめでしょう。ですから手紙の形式で北部の主張を代弁したのは大変よいアイデアだったと思いますが、これが評判がよく、50以上の地方紙に転載された、と自分で書いています。

連載が終わったあとで、協会の幹部が「アメリカ経済学のアウトライン」という題の小冊子にまとめて出版しますが、『アメリカ経済学綱要』（正木一夫訳、未来社、1966年）という翻訳があります。この時もそうですが、リストは「行動の人」として運動に飛び込んだ時に、いつも自分で新聞を作ったり、自分の主張を新聞や雑誌に発表したりして世論に訴え、世論を見方につけようとする、そういうジャーナリストとしての活動をしています。「商業政策の闘争」の時には『オルガン』という週刊新聞を自分で作りました。通算100号、1号が2000部ぐらい出ていました。いまお話しした「アメリカ体制」という12通の手紙のほかに、アメリカ時代には『レディンガー・アドラー』（レディングの鷲）というドイツ語新聞の編集も3年ぐらい引き受けています。ペンシルヴェニア州はドイツからの移民が多いところで、ドイツ語の新聞が20紙以上も出ていたようです。

この新聞についてももう1つお話しておきましょう。アメリカでは1828年に大統領選挙があって、アダムズとジャクソンの2人の候補が立っていましたが、ペンシルヴェニア州のドイツ系移民の票が2人のどちらに流れるかによって当選が決まるのではないかと、そういう予想があったようです。『レディンガー・アドラー』紙はドイツ系移民に影響力の強い新聞で、リストはその新聞の編集者として断然ジャクソンを応援しました。それもあってか、この時の選挙ではジャクソンが大統領に当選しました。ですから、リストはジャクソン大統領とはかなり親しい関係で、ジャクソン時代の国務長官とも親しかったようです。2年後にリストは米国の市民権を取って1年間ヨーロッパへ旅行しますが、その時には国務長官から特別の秘密の使命を頼まれたのではないかと、と言われています。

リストが「行動の人」であったことを示す事実がアメリカ時代にもう1つあります。炭坑と鉄

道の事業家としての活動です。19世紀前半は、工業の動力として、また交通機関の動力として、水車に代わって蒸気機関が、馬車に代わって鉄道が登場した時代でしょう。そのために燃料である石炭の採掘に目が向けられている。そういう時代ですから、リストは友人といっしょに、無煙炭を採掘する炭坑とそれを川の港まで運ぶ鉄道の会社を起こしたのです。この時には自分で山のなかを歩いて石炭の鉱脈を発見し、地質調査や路線の決定、用地の買収、建設資金の調達、線路の敷設から機関車や車両の買いつけまでやり遂げたといわれています。この事業に成功したことで、リストは相当の財産を獲得しましたが、鉄道の専門家としても知られるようになります。リストが作った「小スクールキル鉄道」は全長22マイルの短い貨物鉄道ですが、蒸気鉄道としてはペンシルヴェニア州では2番目、全米でも5番目以内に入る鉄道です。1831年の開業時は馬車鉄道でしたが。アメリカで保護関税運動や炭坑と鉄道の事業で活躍した点は「行動の人」としても、またジャーナリストとしても、リストが異色の経済学者であったことをよく示しています。

◆「1匹のドイツの羊」 リストがアメリカで保護関税運動や炭坑と鉄道の事業家として活躍したこと、ジャクソン大統領と親しかったことはいまお話した通りです。もし彼がそのままアメリカに留まって事業を続けていたら、あるいは連邦政府で働いていたら、ドイツ系のアメリカ人として成功を収め、出世していたのではないかと思います。

ところがリストはそういう道を選ばないでドイツへ帰ります。アメリカで成功するよりも、その経験をドイツのために役立てよう、その気持ちの方が強くてドイツへ帰るわけですね。彼はドイツの友人に宛てた手紙に、「すべての私の計画の背後にあるのはドイツです」と書いています。保護関税運動で活躍し、炭坑と鉄道の事業に成功したリストは、ドイツで保護関税の実現や鉄道の建設のために働きたい、そのことが頭にあって、アメリカでの成功に満足できずにドイツへ帰るわけですね。

それでは、ドイツへ帰ってからどうなったのでしょうか。アメリカでの経験を生かそうとドイツへ帰ったのは43歳の時ですが、それ以降10数年間、リストは定職につくことができず、したがって固定給ももらっていませんでした。私はこの大学に34年間勤めました。給料の遅配や欠配は一度もありませんでした。だから生活が安定して、いまでも元気でいられます。リストはドイツのために働こうと思って帰ってきたのに、定職につけず、固定給ももらえない。子供が5人いて、子煩悩ですから、ドイツへ帰ってからの生活はリストも妻のカロリーネもさぞ苦しかったらと思います。

ドイツへ帰った翌年ライプツィヒという町に住んだのは、ここが将来ドイツの鉄道の中心地になると考えたからでしょう。ここでドイツ最初の長距離鉄道といわれる「ライプツィヒ～ドレスデン鉄道」を建設しようと思しますが、最初のうちはリストの話の本気にする人はいません。ドイツに鉄道など作れるはずがない、どうやって金を集めるのだ、土地を買う貴族はいても鉄道に金を出す貴族はいない、夢のような話だ。リストは株式会社を作って株を売り出して資金を調達す

ればいけるという。それを確信して、会社を作って株を売り出したら何と2日間で完売したので。1835年のことです。あまりに売れゆきがよくて、リスト自身が株を買い損ねたということです。

「ライプツィヒ～ドレスデン鉄道」は1839年に全線開通、一番列車は4月7日に全長115.42キロを3時間で走行しました。しかし、開通式には最大の功労者リストの姿はありませんでした。彼はライプツィヒの市民ではない、刑罰を受けてドイツの市民権を失った人間だ、アメリカ人ではないか、アメリカの領事が何を言うか。リストにも、よく相談せずに自分の一存で事を進めてしまうところがあったようですが、ライプツィヒの商人から嫌われて追い出されてしまったのです。ブラウンは19世紀のアメリカとドイツを比較して、「能力主義」の社会と「権威主義」の社会だと言っていますが、アメリカで鉄道事業で成功したリストはライプツィヒではその能力を発揮することができませんでした。殉教者のような気持ちでパリへ移ったリストは、パリの図書館で猛勉強をして名著『経済学の国民的体系』を書くのですが、この本については〔Ⅱ〕でお話しましょう。

パリからドイツのコッタという書店主に宛てた手紙のなかに、「結局、私はドイツで虐待を受ければ受けるほど住み心地がよいと感じる1匹のドイツの羊です」という言葉があります。ドイツへ帰れば虐待を受ける、安穩には暮らせない、それが分かっているでも何くそと元気が出て、ドイツのために働こうという気持ちになる。ドイツのためなら自分は生贄（いけにえ）の羊になってもかまわない。そんな強い気持ちが込められた文章ですね。リストが死んだオーストリアのクフシュタインという町にはリストの銅像が立っていますが、その台座にリストを称えるグライフの4行の献辞が刻まれています。その最初の1行は「祖国のために労を惜しまぬ無給の弁護人」です。アメリカでの成功を捨ててドイツへ帰ったが、地位も給料もなく、虐待を受けるなかでドイツの国民のために労を惜しまず働いた弁護人だった、ということですね。これもリストが異色の経済学者であったことをよく表している点ではないかと思います。

◆素顔のリスト リストが異色の経済学者であったことをお話しましたが、ここで、リストと親しかった3人にリストの素顔について話してもらいましょう。

最初是一緒に小学校へ通っていた幼友達のメルクの回想です。「彼は学業では格別の進歩がなく、ラテン語の勉強は嫌いだった。その代わりに、子供の時から小説や旅行記や地誌やその他の娯楽本を……読んでいた。ドイツ語の作文はなかなかのもので、ペンの運びを心得ていた。分かり安く・鋭い・实际的な知識、溢れる才気、陽気な気分は当時から彼の特徴であった。」毎日一緒だっただけに、よく見えていますね。メルクはのちにリストが生まれたロイトリンゲンの市長になり、リストの冤罪事件では彼も罰金刑を受けます。

次はスイスへ亡命していた時のメンツェルの回想で、同じように亡命した仲間と4、5人で旅行に出て、静かな湖水で舟遊びをしていた時のことです。リストは突然興奮して、自分がヴェルッテンベルクでいかにひどい目に逢ったか、ボートのなかで立ち上がってそのことを大声で話

し始めた。自分たちが押さえなかったらリストは湖に落ちていたところだった、というそれに続く文章です。「彼は私の知る限り最も激情的で、若いのに太っていた。背の低い丸っこい身体の上に不釣り合いに大きな獅子のような頭が突き出ていたから、一度会ったら決して忘れないだろう。目は怒りに燃え、広い額には雷光が走り、口は火山のように絶えず火を吹いていた。」メンツェルはリストより8つか9つ年下ですから、凄い先輩だという印象がよほど強かったんでしょうね。

最後にもう1人、リストの後輩でテュービンゲン大学の教授で有名な国家学者のR. v. モールの回想です。モールはどちらかというと冷めた目でリストを見ています。「彼は才気煥発で元気がよく、博識だから愉快的な仲間だったが、熱に浮かされたように騒ぎ出し、食事中も分別がなく、まったく困った悪い癖があった。だから、会食のときには彼の近くの席に座るのを避けねばならなかった。」いつ怒鳴り出すか分からないから、コンパや忘年会の時などあの人の隣には座りたくない、そんな人が時々いるんじゃないですか。リストにもそういうところがあったようで、自分でもそれが欠点だと言っています。

そのほかにも、馬車が出る直前まで手紙を書いたり買物をしたりせわしくしていたとか、半ポンド(約250グラム)の肉を一度に口に入れて喉につまらせそうになったとか、声が大きく、忙しく動き回り、粗野で自意識過剰だ、などという印象を与えていたようです。こんな先生がいたら次々に問題を起こして大変ですね。

もっとも、こういう印象を書いているモールは後にリストの主著『経済学の国民的体系』が出版された時には、自分はいままで一歩距離を置いてリストを見ていたが、この本はよい本だ、自分が絶対に保証する、リストがこんな素晴らしい本を書くななんて夢にも思わなかった、とリストの著書を絶賛する書評を新聞に書いています。しかもこの書評を自分が書いたことはリストには絶対に知らせないでくれ、と新聞社に念を押し匿名で出しているのです。のちになって、リストはこの書評を書いたのがモールだということを知ったらしく、5年ぐらいたってから、自分の本の評判がよくて成功したのは大部分あなたのお蔭です、というお礼の手紙を書いています。いい話ですね。

〔Ⅱ〕 主著：『経済学の国民的体系』（1841年）

この異色の経済学者は大きな本を1冊残しています。小さな本なら教授になった時に作ったテキストとか『アメリカ経済学綱要』とか、そういうものがありますが、リストの大きな著書はこの『経済学の国民的体系』（小林昇訳、岩波書店、1970年）1冊だけです。この本について、難しい問題は省いて、簡単にお話しましょう。

◆未完の体系 この小林先生の翻訳には著書の第3版、リストの生前の最後の版ですが、その中扉の写真が載っています。それを見ると、一番上に『経済学の国民的体系』という書名が、その次にフリードリッヒ・リスト博士という著者名があります。ところが、その下にもう1つ「第

1巻、国際貿易、貿易政策、ドイツ関税同盟」という題名があって、その下が出版社名となっています。

つまり、リストはこの本を、イギリス（アダム・スミス）の経済学に対抗して自分が構想した「国民経済学」の体系の第1巻として書いたのではないかと、ですから、中扉に「経済学の国民的体系」という全体の体系の題名と「国際貿易、貿易政策、ドイツ関税同盟」という第1巻の題名と、2つの題名が載っている、というわけです。ところが、これは私の推測で断言できませんが、リストは5巻か6巻の体系を作ろうと考えていたのに、第1巻が出たあと第2巻、第3巻と続巻を出さないうちに死んでしまった。そのために、現存する第1巻に「国際貿易、貿易政策、ドイツ関税同盟」という書名といっしょに、『経済学の国民的体系』という全体の体系の題名がついているのでしょうか。リストが構想した「国民経済学」の体系が「未完の体系」だというのはこういうわけです。

ではなぜ、リストは国民経済学の体系の第1巻に貿易問題を取り上げたのでしょうか。第1巻が貿易問題、という経済学全集は珍しいのではないですか。リストはどうしてそうしたのか、その点については彼自身が説明しています。リストは最初にコッタ出版社にこういう本を書きたいと言った時に、コッタから、学者が初めて本を出す時には、自分がどうしても書かずにはいられないという一番重要な、一番差し迫った問題に絞って、それを書いてはどうですかという返事をもって、なるほどその通りうだと思った。それで、当時のドイツにとって一番重要で差し迫った問題はイギリスとの貿易問題（綿糸や麻糸の輸入）、あるいはオランダとの貿易問題（砂糖やコーヒーの輸入）であり、これがドイツ国民の将来を左右する死活問題だと考えて、第1巻の主題に選んだということです。

ドイツ関税同盟がイギリスやオランダに対して、同盟の貿易政策として自由貿易か保護主義かどちらを選ぶか、その点にドイツの工業の発展も国民の将来もかかっているのではないかと、リストはこう考えて最も大事な貿易問題を第1巻に書いた、「国民経済学」の体系の第1巻になぜ貿易問題を選んだのかという疑問は、この説明で解決するのではないのでしょうか。ただ、難しいのは、リストはあと5年半、死の直前まで活動していたのに、しかも第1巻の評判がよくてコッタから続巻を書いてくれと頼まれていたのに、第2巻、第3巻を書かなかったことです。難しい問題で私の考えは最後にお話しますが、とにかく続巻を書かなかった。第1巻だけが出て第2巻以降が出なかったのですから「未完の体系」ですね。

◆20年余の思索と経験の結晶 次に、リストは大きな本をこの『国民的体系』1冊しか残しませんでした。この本は20年余にわたって独学で続けてきた思索と、いろいろな運動に参加して得た経験とが詰まった本です。この本が出来上がるまでの20年余については3つの局面があったと言われていて、私もその通りだと思います。

第1の局面はテュービンゲン大学の教授になった頃1817、18年頃です。担当した講義は「国家行政実務」で行政学ですが、今で言うと日本経済論のような講義です。リストは猛烈に経済の

勉強をして、それまでの教科書だけでなく、各地の商業会議所や商業組合から政府や議会に提出された請願書とか陳情書を読んで、生産者や商人の生の声というか「時代の声」に接したのです。リストがそれまでに知っていた経済学は、自由貿易によって経済は繁栄すると説いていました。しかし、この時に彼が初めて接した「時代の声」は違っていました。ナポレオンとの戦争が終わってイギリスとの間で自由貿易が再開されたら、イギリスから安い工業製品がどっと入ってきて、ドイツの幼弱な工業は大変な目に逢った、だから何とかしてくれという請願や陳情がたくさん出てきたのです。リストはその生の声、「時代の声」に接して、はてな？と疑問を感じたのです。

教科書は自由貿易によって経済は繁栄すると説いているのに、現実にはイギリスとの間で自由貿易が始まったらドイツの経済は危機に陥っている、この理論と実際との違いに気付いたことが、イギリスの経済学に対するリストの疑問の原点というか原体験でした。リスト自身はこれを1818年だと書いています。

第2の局面はそれから10年ほどたったアメリカ時代です。リストが1827年に「アメリカ体制」という論文を12通の手紙の形式で新聞に発表して、これが『アメリカ経済学綱要』という小冊子になったことはお話ししましたが、私はこの作品は、リストが国民経済学に目覚めて、国民経済学を作らなくてはならんということを初めて表明したマニフェストだと思うのです。この12通のうちの第5番目の手紙、第5信に、「いかなる国民もその生産力を発展させるに当っては、独自の経路をたどらねばなりません。換言すれば、いかなる国民も独自の政治経済学を持っているのです」とありますが、これはリストの国民経済学のマニフェストだと考えています。

イギリスから入ってきた経済学とは違う新しい経済学、自分の国に合った独自の経済学が必要だ、ドイツでもそれを作らなくてはならない、アメリカにいたリストがドイツのことを考えて表明したのです。第1の局面ではそれまでの経済学とドイツの現実との違いに疑問は感じて、なぜそうなのか、まだその理由にまでは思い至りませんでした。それがアメリカへ渡って、保護関税運動に参加したり、運河や鉄道が出来て経済が発展していく、10年で人口が2倍になり、20年で州の数が2倍になる、すごいですよ。それを見てカルチャーショックを受けて、アメリカでは独自の経済学を作ってそれを指針に経済が発展していくのだ。ドイツも見習わねば、と国民経済学の必要を痛感するのですね。

第3の局面は、もうお分かりでしょう、それからまた10年たって、パリの図書館でこの本を書き上げたことです。パリ時代にはこんなことがありました。パリへ着いてすぐ懸賞論文の募集に応募して「経済学の自然的体系」といわれている論文を書きます。この論文は3点の「優秀作」には入ったのですが、賞金は貰えませんでした。入賞は逃がしましたが重要な論文で、ルソーの『人間不平等起源論』のように、懸賞に落ちた傑作と言えるかもしれません。パリ時代には、懸賞論文のほかにも、著書の準備的作品といえる論文を6編書きました。そのなかで、リストが著書の「先駆」となったといっている論文が2編あります。「外国貿易の自由と制限、歴史

的考察」と「国民的工業生産力の本質と価値」ですが、この2編は著書が出る前年にストックホルムでスウェーデン語版が出ているのです。スウェーデンとハンガリーがリストに一番早く注目したということは面白いですね。

◆**著書の構成** この本は全部で36章、緒言を除いて590ページぐらいの大きい本で、次のような構成です。最初に緒言があって、次が序論、それに続く本論は、第1編歴史。第2編理論。第3編諸体系。第4編政策。最後に1ページぐらい補遺があります。まず注目されるのは、第1編が歴史、第2編が理論となっていることです。アダム・スミスの『国富論』は、私は専門家ではありませんが、第1編が分業論で第2編が資本蓄積論、と最初に理論的な部分がある。次の第3編が中世以降の都市と農村の発展で経済史ですね。理論があって次に歴史がくる、当時の経済学の教科書は大体そうだったようです。アメリカで出たレイモンドの本も、まず理論があって、歴史や政策はそのあとです。リストも先ほどお話した懸賞論文では、前半の第1章から第26章までが理論で、後半の第27章から第32章までが歴史です。パリで勉強を続けるうちに歴史から学ぶという考えが強くなって、第1編が歴史、第2編が理論になったのでしょうか。

この本には本論の前に非常に長い緒言（小林訳で41ページ）とかなり長い序論（小林訳で20ページ余）があります。長い緒言と長い序論があってそれから本論が始まるというちょっと珍しい構成の本です。その緒言と序論から、この本のエッセンスともいえる部分をレジュメに引用しておきました。「緒言」からの引用は、「わたしの提示する体系の、学派との特徴的な相違として、国民国家をあげる。個人と人類との中間項としての国民国家の本質の上に、私の全建築は基礎をおいている。」学派というのはイギリスの経済学のことですよ。リストはここで、個人の経済学、人類の経済学と並んで国民経済学が必要であり、その基礎は国民国家だと述べています。

次は「序論」からの引用です。「著者は、理論とはまったく矛盾することとなるが、まず第1に歴史に教えを求め、そこから自分の基本的諸原理を引き出し、この諸原理を発展させたのちに先行の諸理論体系に検討を加え、最後に、自分の意図はどこまでも実践的なものであるから、貿易政策の最近の事情を説明するであろう。」第1に歴史に教えを求めとあるように、第1編「歴史」の最後の章は第10章「歴史の教え」です。そこから自分の基本的諸原理を引き出し、この諸原理を発展させ、これは第2編「理論」ですね、先行の諸理論体系に検討を加え、これが第3編「諸体系」、最後に貿易政策の最近の事情を説明する、これが第4編「ドイツ関税同盟の貿易政策」です。

リストは支配的な経済学が唱える価値の理論に対して、国民経済学では生産諸力の理論を主張しましたが、両者の違いをアヘン貿易を例にとりて説明しています。この本が出た時にアジアではアヘン戦争が起こっていましたからね。イギリスの商人は大量のアヘンを広東に輸出し、そこでこれを紅茶や絹と交換している。この貿易は両国の商人にとっては儲かる貿易である。価値の理論によれば、この貿易は両方の国民にとって有益である。ところが、これに対して広東の総督は次のように主張する。アヘンの消費は清国の人々の道徳や知性や家庭の幸福や公共の平安に書

き尽くせないほどの悪影響を及ぼしている。アヘンの消費と輸入は現在ものすごい勢いで増加しているので、この貿易は最大の国民的害悪をもたらしている。儲かる貿易であっても、国民に大きな害悪をもたらす貿易もある。価値の理論では儲かるからということではこれを是認しがちであるが、生産諸力の理論は国民に大きな害悪をもたらし、国民生産力を損ねている点でこの貿易に反対する。

自由貿易と保護主義については特に説明する必要もないでしょう。ただ、リストの貿易論を保護貿易論だと書いている本が時々目につきますが、リストは保護貿易という言葉は使っていないようです。国内工業のための保護制度あるいは保護主義、つまりドイツの国民的工業を發展させるためには「適度の保護関税」が必要だ、という立場をとっているのです。保護貿易とたっただけでは、どういう貿易を保護するのか分かりません。

◆**初版以後の各版** この本は1841年に出版されてから、こんにちまで何度も版を重ねて読み継がれてきました。出版された当時は物凄い攻撃を受け、大ぼら吹きだとか、別の本からの剽窃だとかののしられましたが、攻撃した本は忘れられたのに、リストの本は攻撃を乗り越えて世界中で読まれてきたのです。初版が出版されたドイツでは何度版を重ねたか数え切れません。冷戦時代には東ドイツでも西ドイツでも出版されて、東ドイツの人も西ドイツの人も読んでいました。一番新しい版は2008年に出た版で、編集者はヴェンドラー、挿し絵入りの本です。これまでに出版された「底本」、つまりこれが『国民的体系』の間違いなく本物だというのは、『リスト全集』の第6巻に載っているもので、1930年に出版された。その後の版はすべてこの全集版をテキストに使っています。

外国語版もたくさん出ています。詳しく調べたわけではありませんが、ドイツ語の経済書ではマルクスの次に世界中で読まれているのではないのでしょうか。最初に出たのはハンガリー語版で、これはリストの生存中に出版された唯一の外国語版です。次にフランス語版、何度も出ていますが、1998年の版はあのエマニュエル・トッドの編集です。英語版ではフィラデルフィア、メルボルン、ロンドン、ニューヨークの順に出ています。イギリスよりアメリカとオーストラリアで先に読まれていたのですね。それからルーマニア語版、スウェーデン語版が出て、次が日本語版、これは1889年(明治22年)、リスト生誕100年の年で、英語版からの重訳です。そのあとロシア語版、ブルガリア語版、中国語版(1927年)、フィンランド語版、スペイン語版が出て、戦後にイタリア語版、韓国語版(1983年)、ベンガル語版(?)が出ています。スペイン語版は戦後にも3回出ていますが、ヴェンドラーさんの話ではインドやアルゼンチンにリストの研究者がいるということですから、メキシコやラテンアメリカで出版されたのかもしれない。異色の経済学者リストは生前にはドイツのために一身を投げ打って働いたのに、ドイツは彼に何も報いませんでした。しかし死後170年にもなるのに、世界中の人々に読まれているのです。

◆『国民的体系』の謎 リストの主著についてお話しした最後に、この本について最近私を感じている小さな疑問に触れておきたいと思います。実は、もっと早くこういう疑問に気付いて、先

輩の先生方に聞いておけばよかったのですが、いまの私にはこの疑問を解決する確実な証拠を発見することが難しく、あれこれ推測するだけです。こんな問題があるのではないか、ということだけお話しておきましょう。

疑問の第1は書名の変更です。リストは最初「成文法のもとでの世界交易の自由と諸国民の結合について」という書名を考えましたが（1838年9月）、1年後には「経済学の自然的体系」という書名に改めます（1839年9月）。著書の緒言には、長い間「経済学の自然的体系」という書名で出そうと思っていたが、本を内容を読まずに書名だけで判断する読者が大勢いるから、書名を変えたほうがよいと友人に言われ、それで「国民的体系」に変えた、と書いています。この本はリストがパリで書いて、パリから原稿を出版社に送ったといわれています。リストは1840年5月始めにパリからドイツへ戻ったのですが、3か月以上もたった8月末の手紙には、「経済学の自然的体系」という書名で年内に本を出すと書いています。原稿は印刷に入っていたのですが、いったいつ、誰に言われて、書名を「自然的体系」から「国民的体系」に変えたのか分かりません。

次に、先ほどこの本の緒言と序論から引用した文章を読みましたが、緒言には「わたしの提示する」「わたしの全建築は」「わたしは長い間」というように、「わたしの」「わたしは」という言葉が頻繁に使われています。小林訳の最初の10ページだけでも七十何カ所ですから、41ページもある緒言では200カ所以上ではないでしょうか。それが序論と本論になると「わたしの」「わたしは」という言葉が消えて「著者は」となっているのです。私には緒言と序論、本論との間のこういう違いがどうも気になるのですが、皆さんは不思議に思いませんか。

この本を通して読むと、序論と本論とは緊密に一体となっていると私には思えます。同じ時に同じ場所で、パリでしょう、同じ精神状態を保って書かれたと思えるのです。しかし、緒言だけはどうも違うのではないかと。どこで書いたのか、あるいはあとから大幅に追加したのか分かりませんが、やや違った精神状態で、非常に主観的で、思ったことを十分に推考することなく大急ぎで書いたのではないかと、そんな気がしてなりません。リスト自身は「著書と緒言との間の完全な違い」を認めています、緒言もパリで書いたと言っています。しかし、緒言のなかの3ページもある長い注は1841年1月に追加したとしか考えられません。リストの論文には時代の政治や経済の出来事が強く反映していますから、この疑問を解くためには当時の貿易問題をくわしく調べる必要がありそうです。

一番驚いたのは、この本の初版の目次に見出しの間違い（訂正漏れ）があることです。これには本当にびっくりしました。一番最後の章ですが、目次には第4編「政策」、第36章「ドイツ国民の経済」と書いてあります。ところが、そのページを開いて本文の見出しを見ると、第36章「ドイツ関税同盟の貿易政策」となっています。明らかに違いますね。今は全集版が底本になっていますから、この本をドイツ語で読む人はみんな全集版を読みますが、全集版ではむしろ訂正されていますから、古版本を読む人は少なく、初版の目次に見出しの間違いがあることなど誰も言

いませんがね。もっとびっくりしたのは、初版ばかりでなく、リストの生前に出た第2版、第3版でも目次の見出しの間違いが訂正されていないことです。リストはどうして訂正しなかったのでしょうか。

埼玉県の新座の立教大学のキャンパスに「小林文庫」があって、『国民的体系』の初版、第2版、第3版が揃っています。私は去年(2014年)の9月と今年の5月の2度ここでこの本の初版から第3版まで見せてもらいました。どうしても自分の目で確かめておきたいと思ったからです。貴重な大事な本だから手を洗ってきて下さいと言われて、手をごしごし洗ってから見せてもらいましたが、目次の見出しがやっぱり違っていました。では、リストの死後に出たどの版で目次の見出しの間違いが訂正されたのか。まだはっきりとは分かりませんが、死後最初に出たホイサー版(1851年)では間違ったままです。最初の日本語版(1889年)では訂正されていますから、その間に出た版、1883年に出たエーエベルク版ではないかと推測しているのですが、なかなかその本を読むことができません。とにかく、まだ分からない疑問が残っている本です。

なお、初版の最後の章の見出しについては、おそらくリストの本の間違いに気付いてそれを取り上げたオシアンダーの「変わった本」があるのですが、それについては「本の目次」という短い文章を『神奈川大学評論』(80, 81号)に書きましたから、興味のある方はそれをご覧ください

[Ⅲ] 『関税同盟新聞』(1843—49年)

◆「体系を仕上げる」か「時局を論じる」か 時間がなくなってきたので、ここからははしょって駆け足でお話します。

主著(第1巻)の出版から5年半、リストは死の直前まで活動を続けました。ところが、その5年半の間に第2巻も第3巻も出さず、代わりに最後の4年間は『関税同盟新聞』という新聞を1人で編集して発行したのです。リストはなぜ、「国民経済学」の体系の第2巻……を出さずに新聞を作ったのか。私の考えはこうです。主著の翌年(1842年)に書いた「農地制度論」でリストはこう言っています。主著の最後の章「ドイツ関税同盟の貿易政策」をもっと詳しく論じ、主著に反対して出た批評への反論を加えて第2巻を出そうと思っていたと。その間に、リストは何か、ある大事な問題に気付いて、第2巻を出して「体系を仕上げる」ことを後回しにして、先に『新聞』を出してこの差し迫った大事な問題を取り上げる、つまり「時局を論じる」方を選んだのではないか。

では、リストが気付いた大事な差し迫った問題とは何でしょうか。私はイギリスの貿易政策の変化ではないかと思います。イギリスが植民地の開発に力を入れて、必要な食糧や原料を何でも植民地から優先的にもってくる。小麦はカナダから、羊毛はオーストラリアとインドから、亜麻と大麻はニュージーランドから、綿花も、アメリカの南部に依存しては万一の場合に危ないから、インドから入手する。こうなると、今まで食糧や原料をイギリスに輸出していた国々は苦

しくなる、特に一番大きな打撃を受けるのはドイツだろう。イギリスは外国との貿易より自国の植民地との貿易を優遇し（差別関税）、本国と植民地とを一体とした「帝国経済圏」を作ろうとしている。リストはこのイギリスが作ろうとしている「帝国経済圏」を「本国＝植民地保護制度」と呼び、イギリスでは政治家ばかりか、この政策に賛成する経済学者がふえていると言っています。

リストは主著を書き上げる前後からこの問題に気付いていたのではないかと思うのですが、これは大変だ、一大事だと思って、時間をかけて第2巻を仕上げるよりも、すぐにでも『新聞』を発行して時局を論じ、世論に訴えようと考えたのではないのでしょうか。イギリスはもはや「世界の一部分」「諸国民のなかの1国民」ではなく、「1つの独自の世界」を形成し、「この世界は富と勢力とにおいて他の世界全体に優越している」という世界情勢と、これに対処するドイツの貿易政策とを取り上げている、という内容の点では、著書か新聞か、という違いはありますが、『関税同盟新聞』は主著に続く「国民経済学」の体系の第2巻に当るものだ、とリストも書いています。私が立てた「体系を仕上げる」か「時局を論じる」かという仮説はそういう意味です。

◆『関税同盟新聞』の「趣意書」（1842年11月） リストは1842年の夏頃から『新聞』を作る準備を進めていますが、「趣意書」は新しく出す新聞のいわば予告編です。

§ 論説、関税同盟の発展、国民的貿易政策と世界事情。 § ドイツの国民経済の発展、国民的交通制度（全国鉄道網）、郵便・貨幣制度、国民銀行、特許法と商法、技術教育や工業博覧会、工場の規制、農地制度と農業立法、国外移住。 § 国民的利害を守り、外国の新聞・雑誌からの攻撃に対する反論。 § ドイツ各地や外国からの通信。 § 旅行記、議事録の抜粋、統計（世界の134の貿易港やイギリス71の植民地の統計など）。

◆晩年のリストの最大の業績 この『新聞』は標準16ページの週刊新聞で、大勢の協力者や寄稿者、通信員はいましたが、編集者はリスト1人です。論説や通信の他に、「雑録」という欄があって、ここには、リストが世界中の80以上の新聞や雑誌から集めたニュースが載っていて、当時の世界各地の経済や生活を知るうえで非常に面白い。最後に、この『新聞』が発刊したのはあの黒船が浦賀沖にあらわれるちょうど10年前ですが、その点を頭に入れて、創刊号（1843年1月1日号）の目次だけ見てみましょう。

英国経済（学）の国民的体系とドイツの農業（リストの論説で新聞全体の基調です）

[雑録] 国民銀行についてウェブスター 英国の農地の状態とドイツからの食肉輸出の見込み 時計の製造における革命 新型の大砲 グアノ 英国の羊毛生産
ファンディーマンズランド、灌漑 蒸気飛行機と地球を貫通するトンネル 東インドの羊の品種 英国の最新の農業報告 食肉を保存するチャールズ・ペインの発明 喜望峰とニュージーランドとにおけるぶどう酒の生産 フランスにおける甜菜糖の製造

ウェブスターはアメリカの政治家で、これはボストンで行った演説、グアノはアフリカや南米の海岸に堆積した海鳥の糞、肥料として抜群の効果があり、英国の農業革命の主役でした。ファンディーマンズランドはタスマニア、次の記事は、蒸気機関を飛行機に据え付けると4日間でロンドンからボンベイ（ムンバイ）まで飛べるとか、英国から地球を掘り進むと広東に達するとか、いささか荒唐無稽な夢です。ペインの発明は要するにハムの製法で、塩水に漬けて密封して送る。喜望峰のワインは味はいまいちだが、ニュージーランドのワインはフランスのものに負けない。こういう記事を見ると、当時は実にたくさんの情報が新聞を通して世界中に広がっていたことが分かります。これだけの情報を1人で集めた点でもリストは異色の経済学者であった、と言えるのではないのでしょうか。

『関税同盟新聞』には、「ドイツ関税同盟の貿易政策」に関する多数の時論や、著書に反対する自由貿易論者への反論、さらに世界中の新聞や雑誌から集めたニュースが掲載されており、主著に続く晩年のリストの最大の業績ではないか、と私は考えています。リストが死んだ時に、地位も肩書きもない1人の民間人であるこの異色の経済学者の死に、ドイツの60以上の新聞や雑誌が、そのうえ外国（オーストリア、ハンガリー、ルーマニア、フランス）の10の新聞や雑誌が追悼文を掲載したということです。最後の方ははしょってしまったので、少し分かりにくくなったかもしれませんが、今日のお話はこれで終わることにします。長い時間、ご静聴ありがとうございました。

◆参考文献

- リスト, F. 著, 小林 昇訳『経済学の国民的体系』（岩波書店, 1970年）
- リスト, F. 著, 正木一夫訳『アメリカ経済学綱要——アメリカ体制』（未来社, 1966年）
- 諸田 實『フリードリッヒ・リストと彼の時代』（有斐閣, 2003年）
- 諸田 實『晩年のフリードリッヒ・リスト』（有斐閣, 2007年）
- 諸田 實『「新聞」で読む黒船前夜の世界』（日本経済評論社, 2015年）
- 諸田 實「本の目次」（『神奈川大学評論』80, 81号, 2015年）